

News Letter

Foreign Student Service, Agriculture

京都大学の学風

岩坪五郎

〔近畿大学農学部
京都大学名誉教授・林学教室〕

20年近く前のことだが、私たちの研究室にいた中国留学生に質問された。

今、京都に来ている中国教育部の部長さんに尋ねられた。日本人のノーベル賞受賞者が京都大学関係者に集中しているのはなぜか、と。自分たちは答えられなかった。先生、教えてほしい。

これに答えるべく日本人教官たちで話しあった内容をいくつかご紹介する。

- A. 京都は街が小さく、自転車で通学できるからである。昼間は講義や実習や会議でとらえてしまったり思考はできない。できるのは夕方、5時以降である。京都は何時まで大学にいても自転車で帰宅できる。東京、名古屋、大阪といった大都会では終電に間に合わなければならない。正味の研究時間を京都の人間は数倍多くもっているのだ。
- B. 京都大学では、学生も教師も平均点で比較した場合、他に比べ決して優れているとはいえない。しかし、標準偏差値が、バラツキがきわめて大きいのではないか。飛び離れて優秀な人が雨後の星ほどこいて、それが賞をもらっているのではないか。箸にも棒にもかからぬ出来の悪いのも、いっぱいおるで。
- C. ある私立大学から私たちの研究室の修士課程にはいった女子学生が、予備校に頼まれて掲載した京都大学農学部の紹介記事が、Bの意見を支持するものとしてだされた。「京都大学農学部では、がんばって研究しようとするものに、たいへん親切です。先生も図書室の人たちも手とり、足とりサポートしてくれます。研究を阻害するものは何もありません。研究者の天国といえるでしょう。一方、研究をしないでおこうという人にもきわめて寛容です。注意したり咎めたりする人は誰もいません。果てしなく落ちこぼれていくことができます。考えようによっては、京都大学農学部は恐ろしいところです。」
- D. 京都大学から東京大学に転勤した仲間が、両大学を比較していった。研究計画の討論会をやる。東大の学生は皆よくできる。スマートにまとまる計画をたて、実施され、如才ない研究発表がおこなわれる。京大では、そうではなかった。とくに院生たちが、ボロクソにけなす。アホかおまえは、秀才ぶらしやがって、そんなことはどこの教科書にでも書いてあるわい、という。とうてい実現不可能と思われるのがでると、オモロイやれやれ、という。その結果、すぐれた研究がまれにはでるが、多くは惨憺たるものとなる。しかし、それを責めはしない。研究とはそんなものだ、皆、思っている。
- E. 関西のマスコミが京都大学をはめる言葉は、自由の学風、野党的精神、京都学派、探検大学などなどである。京都学派や

探検大学と称せられる成果はおもにフィールドサイエンティストたちによってあげられた業績である。それは、常識の枠を超えたすぐれた発想と綿密な計画によって、かなりの長期間、海外でなされたものが多い。ということは、かなりの長期間、その教官の講義は休講になったであろう。その海外調査に参加した学生は、大学を休まねばならなかったであろう。規則の厳重な組織では、それは、実現不可能である。

これらを総合すると、京都大学は、規律正しく、統制的に維持された組織体ではなく、多様性にとんだヤオヨロズの神々が共生する社会であるといえよう。けっしてデタラメなのではなく、もっと高度な秩序が、支配ではなく、なんとなく存在しているのである。

さて、海外からの留学生に学位を授与するのは、京都大学の重要な仕事のひとつである。留学生の場合、日本人学生とちがって時間の規制があるから、まあゆっくりがんばって、ええのを書き、というわけにはいかない。留学生として引き受けた以上、少々おどしても、すかしてもいいのを書いてもらいたい。最初の段階で、京都大学の学風を説明し、自ら努力して、独創的、創造的なをつくらないと、ノルマの消化といった態度では駄目だよと、念を押しておかねばならない。

京都大学で学位をとって帰った留学生たちは、京都大学を第二の故郷だと考えている。彼らからすれば、京大の現役教授は、本家の跡取りである。本家は、分家にたいして、大きい義務もっている。つまり、分家の発展のために貢献しなければならないのである。研究費や研究設備を入手するとき、いつも、分家のことを考えてあげていただきたい。



留学生たち（中国2人、タイ1人、フィリピン1人、ベトナム1人）とわが家でコンパ

忘れない・京大

姚 耀廣

(元京都大学農学部助手)



私は1992年2月に中国科学院広州化学研究所から中国政府派遣研究者として来日し、最初は京都大学外国人共同研究者、1993年4月からは助手として今年6月まで、農学部で五年半研究生活を送りました。

私が日本に来て1年後、妻も文部省国費留学生として採用され、京都大学農学部博士後期課程に編入学しました。去年6月に、息子も日本に呼び、今は京都市の養徳小学校で頑張って勉強しています。親の勝手の結果とも言えますが、息子の将来にも役立つと思っています。

日本に来た理由は、当時京都大学農学部林産工学科木材加工材料学研究室白石信夫教授が発案し、世界に先駆けて進めている一つの研究に大変興味を持つと共に、奇跡的な経済発展を遂げ、世界トップの経済大国になった日本のことを知りたかったからです。

一番最初に先進国の日本、それも世界的に有名な京都について、ちょっと失望しました。にぎやかな大都会であるはずだと、予想していたからです。日本は明治維新以降、積極的に西洋思想、技術を吸収し、現在は世界二番目の経済大国になりました。この結果、日本はもう文化的にも脱亜入欧ではないかと思っていました。京都に来て、びっくりしたのは、市街、建築はまだ古風なものが多く残され、いろいろな祭りや行事を時折行い、人々もそれらの時に着物、浴衣を着、四条の繁華街のネオンライトの下でも豊かな伝統文化を一杯楽しむことです。日本のこの伝統文化を大事にした上での近代化は中国の近代化過程にとっても参考すべきであると思います。

外国で生活すると、言葉、文化などが違うので不安は当然ですが、しかし、最初から私の目に付いたのは、日本人がきれいに漢字を書けること、多くの漢詩を知ること、日本の熟語、ことわざの多くは中国もあること、中国の歴史は日本にもよく知られてい

ること、また、大学入試に中国人にとってもかなり難しい漢文の問題も入れ込んでいることなどで、びっくりしながらも日本に対する親近感が増えました。

私が日本で行った研究は、木材などバイオマス、特にその中でも今まで用途のあまりない部分、例えば、おがくず、林地廃材、建築解体材などに熱溶解性を付与し、生分解性プラスチックなど環境に優しい材料に変換する研究です。というのは、木材など植物資源は地球上最も大量に存在する可再生有機資源でありながら、その利用効率が非常に低いからです。木材は金属やプラスチックのように加熱されて柔らかくなったり、流動状態をみせるといったことはないのです、その分利用できない部分が多いといえます。従って、木材にプラスチックの性質を持たせるようにすると、現在使えない品質の悪い樹種やおがくずのように小さくなったものでも成形でき、利用しうることになります。そのような意図においての検討は、十数年前から京都大学で始められ、近年環境、資源問題などで、益々注目され、多くの研究費が与えられました。従って、研究室の研究設備は十分に整備され、研究費も多かったのです。私は、この様な素晴らしい研究環境の中で研究できるのは、本当に幸せだと思いました。この五年あまり、白石信夫教授の指導の元で、またほかの先生方と学生の協力の下で精力的に研究を行い、一応の成果を得ました。今は、厳しい環境問題の中で、この技術の実用化が社会的に求められるようになって来ています。

研究のほか、助手として、学生の工場見学の引率、試験監督、公開講座の企画、有機、無機廃液の処理など、いろいろな役割を分担することにより、大変勉強になるだけではなく、ある程度京都大学の運営および教育体制も知ることになりました。

この5年あまりの間に、私は日本、または海外の多くの学会などに出席することが出来、また、中国からも多くの研究者が私の所属する研究室を訪ね、広い面での学術交流が出来ました。

現在の中国の研究者が求められている、より実用的な研究開発能力を培うためと、今までの研究成果を実用化するために、今年の6月に京大の職を辞め、会社に移りましたが、今までの京大の5年半に、白石教授を始め、多くの先生方、または事務官の方々に大変お世話になり、仕事、生活両面において外国にいる不便をあまり感じないほどでした。ここに、これらの方々には厚く御礼を申し上げます。

この5年半、私にとっては学問だけではなく、いろいろな面において大変勉強になりました。その間に取得した知識と経験は、自分の将来にとって、非常に貴重な財産だと思っています。

Letters from Alumni



Some of My Nights in Kyoto

M. Abdul Karim

(Bangladesh)

Honestly say, most of my days in Kyoto were enjoyable. The memorable companionship of my Japanese and foreign friends kept me away from nostalgia. My Professor, Dr. S. Shigenaga recommended me to learn Japanese culture intimately and I tried my best. To learn Japanese culture one must become a friend of Japanese people. Foreign students may feel that Japanese are very shy. It is true and that is why foreigners should approach first to become their friend. Once you get into a Japanese group you will feel the insurmountable Japanese society is very much enjoyable. Anyway my article is not on Japanese culture but to inform some of my interesting memories.

Old Japanese Idea on Nougakubu: Once I went with my friend, Tazuro Miyoshi, to enjoy Japanese Beer-garden. We met

a retired old person there. He was interested to know me, as where I came from, what was I doing in Japan, etc... After knowing that I was a student of Kyoto University he looked at me for a while and then pour some beer into my glass. I was surprised to see his way of talking and pouring the beer. He then begun to praise me very much for my ability to get admission in Kyoto University. He told that he felt shame for his failure in entrance examination. It was his dream to be a student of Kyoto University.... I was embarrassed with his way of praising me. However, we were enjoying the environment. Suddenly he asked me what faculty did I study. I told *Nougakubu*. He looked at me in such a way as he was despising me. However, he did not say anything openly except that getting admission in *Nougakubu* is very easy compared to other faculties. I did not mind with his comment but was very disappointed with his way of passing comment. When he left Tazuro told me that the old Japanese still think studying Agriculture means one has to go to field for improved plowing and laddering for good rice harvest; and studying Civil Engineering means you have to use the hammer and shovel for making a road or big building under the sun. I was only thinking my publication in Plant, Cell & Environment has no value to these Japanese old man.

Interesting Drunk: Once I went out to call to Bangladesh

from the telephone booth near Imadegawa-Shirakawa street. Unusually I found one middle aged man was sitting down in front of the booth. Unlike usual Japanese he was asking my "Curriculum Vitae". I responded well. He was saying that I am an elite in Bangladesh, he was happy to see a *Gaijin* in this mid cold night, etc. etc.. He offered me his half-finished bottle but I refused. *Doshite* he asked. He then wanted to know why I was there. I told my purpose. He presented an unusual laugh at me and told he had some telephone cards, and please... I refused. *Doshite?* And he reiterated his request. I felt uneasy but could realize that the drunken man was getting angry. Luckily one young Japanese came to me, he was observing for long time, and made me understand that it was better to accept his request otherwise I might be disturbed for long time. He looked very happy. I thought the cards might have completely used. Surprisingly when I inserted the cards, the machine showed that only some units were used. I can not remember exactly but not less than 200 units were remained. I gave many *arigato* to the drunken man although he left the place by that time. Don't you think meeting such kind of drunken *Nihonjin* is not unfortunate rather profitable.

Snoring Man: Once Professor T. Horrie, Lab. of Crop Science, introduced me with a Bangladeshi ex-student who came for a short visit. We took supper together. He told that he did not con-

firm the hotel and whether I would mind if he stayed one night in my dormitory. I said no problem. When we went to my room it was around 8 : 30 P.M. He told last night he had no good sleep and he would like to sleep. He went to bed soon. At that time I was very busy with my Doctoral thesis. My god! After few moments he fall in sound sleep! His sleep was really sound which I could understand from the sound he made (snoring). I have had never heard such roar..*urusai*. My room was very small so you can understand the conditions. I was waiting to have a light sleep but it was impossible. I had earplug, I tried. No! Nothing improved. I had to sacrifice my sleep for that one-day-old acquainted Bangladeshi friend. When he woke up it was already 5 : 00 a.m. On that morning, from 6 : 00 a.m. I had to conduct my experiment. After getting up he expressed his gratefulness to me for allowing him to sleep in my room. He asked me whether he was snoring, and was it noisy, or whether it disturbed my sleep, etc.. I just answered I can not tell you whether I was dreaming the whole night. He smiled and said he never heard his snoring but his wife kept on complaining about snoring. I also just smiled and promised myself if I have some important job on the next day and if some one request me to stay in my room before night I would ask the person whether he snores? If yes — *Gomen-nasai*.

見学旅行（舞鶴・丹後半島，7/17～7/19） 参加者の一口印象記

留学生室ニュースに記した見学旅行参加者の旅行の印象記をほぼ原文のまま載せてみました（紙面の都合で印象記の一部のみ紹介）。

Elmira Karbozova

（地域環境科学，カザフスタン）

The trip was wonderful, exciting and informative as well. When we start from Kyoto city I did not expect even that this trip would be so impressive. May be because it was my first time to see the real big sea. So, I could enjoy marvelous scenery of Japanese Sea and its surroundings and moreover I had a chance to swim, and to learn about fishes and of course enjoy the taste of fish. I'd like come here again. Thanks a lot our "senseis"!

張 玉林

（生物資源経済学，中国）

蒸し暑い京都盆地を逃げ出して、美しい山水の世界に入るのは本当に楽しいことです。でも、丹後の風景は想像より美しい。ここで自然の創造力に感心しながら、日本人の自然に対する大切さをも体得しました。一外国人留学生としての思いですが、日本の自然との交流も、日本人そして日本文化との交流になると考えています。だが、海、山に対する“開発”がこれ以上進むと、どうなるかも心配しています。

Sowiya Eko Cahyono

（熱帯農学，インドネシア）

京都大学附属水産実験所はとても印象に残りました。牛、鳥の養殖はよくききましたが、魚の養殖については初めて見ました。今回の旅行はずっと海を見られたので、インドネシアの思い出が浮かびました。日本海には見どころがたくさんありますので、とても満足です。

喬 景波

（林産工学，中国）

“日本三景”の天橋立がすばらしい。股のぞきで見た風景がきれい。自然は一番きれい。京大農学部の水産実験所で、魚類の

標本を見た。あちらの先生たちの研究環境を見ました。先生方は研究と趣味と一緒に持って、何十年間もそこで研究を続けられ、すごいと思います。留学生室の先生は大変疲れました。どうもありがとうございます。いろいろな国の留学生と友達になることがうれしいです。

Wichan Eiadthong

（農学，タイ）

17.07.1997

Fisheries research station: We had looked about researched works at station and fish museum. Those works are interesting to understand Fish farming in Japan. But on 17.07.1997 was raining, it was not convenient.

18.07.1997

Amano-Hashidate: This area is very good for understanding in Black pine (Kuromatsu) distribution.

19.07.1997

Tango Peninsula: For visiting in this area, it was only sightseeing. Because the time was limited and the schedule so many, we were tired.

All area, we visited, it's so full program. If the schedule have more data about Japanese Agriculture, more interesting. Thank you very much.

Heru Bagus Pulunggono

（熱帯農学，インドネシア）

We have been visiting many objects in many towns of northern part of Kyoto Prefecture for three days. The first visit was Kyoto University Fisheries Research Station in Maizuru city. In the station we visited the warehouse as museum of fish collection and were informed about research activities of the station. The second, we traveled to Amano-Hashidate. Along the way to Amano-Hashidate we visited Goro tower to look around the scenery of Maizuru bay. In Nishi-Maizuru, we visited historic spot of Tanabe castle. In Amano-Hashidate, we traveled the famous beach of Hashidate and Monju temple. The last day we were traveling along the Tango bay by bus. In this day we are visiting many historic spots, scenic spots and the fishing village of the town.

The study tour is very useful for me and from the study tour I could take a lot of advantages. The most important thing I know

is that Japanese people still conserve the historical sites, even though they are going to modernize most of their life aspects. This way of development, I think, could be done in my country.

Hla Maung Thein

(森林科学, ミャンマー)

I had a chance to go studying trip to around sea side in Kyoto prefecture. I got so many knowledge in deal with fishery research techniques and culture of Japanese people. I have so happy and pleased in this touring. Therefore, thanks to Nobuchi sensei, Akamatsu Sensei and Monbusho very much.

Bhatta Balram Kumar

(地域環境科学, ネパール)

During this trip first day I was in the Fisheries Research Station of Kyoto University in Maizuru city. This research station in really very good and appreciable. Beside of the observation, I met with many researcher & talk about the research & technologies.

The trip was very good because not only the research activity due the good coordination of "sensei" but we learned about history, geography, culture & so many things. Thank you very much.

Dody Dharmawan Trijuno

(応用生物科学, インドネシア)

The first visit was Fisheries Research Station, Kyoto University in Maizuru Bay. In this station, a lot of fish samples from many countries were collected and stored in a good condition. These samples were used for study of fish systematics, morphology etc. In this station some experiments were also conducted in relation to fish aquaculture. With the use of fairly simple facilities most experiment can be done effectively.

Next visit was Tango Peninsula. This place offer many varieties of very beautiful and interesting places for sightseeing, swimming and knowing of historical things. For example, white sand beaches, fisheries village, marine fish farming and tomb of emperor family. Along the way during the travel in Tango Peninsula the scenery was very beautiful.

In conclusion this study trip was very impressive and closely related to my field of study. It gave me a general background about fisheries related objects in combination with wonderful scenery.

留学生室ニュース

新入留学生のためのオリエンテーション と歓迎パーティ

平成9年度、農学研究科は11ヵ国から21名の新入留学生を迎えました。4月14日には、オリエンテーションに引き続いて、教職員および在学留学生約150名の参加を得て、恒例の歓迎パーティが農学部大会議室で盛大に行われました。開催に当たり、農学部国際交流推進後援会、アサヒビール、キリンビール、サッポロビール、サントリー、月桂冠、宝酒造、雪印乳業、京都大学生生活協同組合から援助ならびに御高配を賜りました。ここに記して感謝いたします。

農学部国際交流推進後援会の会員加入について

本年は9月に平成9年度の会員加入のお願いを御案内いたしました。「お願い」にありますように、諸事情により会則を改正し、農学研究科および附属機関教職員会員の会費・賛助会員の個人会費を2,000円に、賛助会員団体会費を7,000円に値上げさせていただきました。また、終身会員の扱いを取り止めさせていただきました。よろしく御理解の上、本年度もご賛同いただきますようお願い申し上げます。

バス見学旅行

平成9年度5月15日に、農学部のスクールバスを利用した日帰りのバス旅行を実施いたしました。歴史ある石山寺と、石山にある東レリサーチセンター・東レショールームを訪問し、多数の測定機器や身近に使われている東レの製品などを見学させていただきました。国際的な東レの活躍ぶりに対し、留学生たちのさまざまな質問が飛び交い、実りある一日でした。

見学旅行

平成9年度も農学部留学生見学旅行(7月17・18・19日)を企画し、総勢15名が舞鶴市の京都大学水産実験所と日本三景の一つである天橋立を訪れました。水産実験所での、

魚類の標本・養殖などの見学、天橋立の素晴らしい眺望、丹後半島の見学などを体験し、近くでありながらなかなか知り得ない「もう一つの京都」の文化や自然を満喫することができました。

ア・ラ・カ・ル・ト

私費外国人留学生の大学院修士課程入試の結果

8月26日～28日にかけて、平成10年度大学院修士課程入試が実施されました。その結果、生物資源経済学専攻2名(中国)の方々が私費外国人留学生として合格されました。

短期留学推進制度

平成9年度の短期留学推進制度(派遣)の第1回応募には5名の希望者があり、農学部から推薦されましたが、派遣には至りませんでした。



平成9年度見学旅行(京都大学農学部附属水産実験所、研究調査船・緑洋丸上)

発行所 京都市左京区北白川追分町
京都大学農学部留学生室
電話 (075)753-6298, 6299
印刷所 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷株式会社
電話 (075)441-3155~8